

めでいかすとり
Médicastre



「百日紅」

鶴岡地区医師会

令和3年 **9**月号

令和3年度「病院勤務医と医師会会員との懇談会」開催される

日時：令和3年7月16日(金) 19:00～
場所：鶴岡地区医師会館 3階 講堂

例年2回行われている標記懇談会は、7月が医師会主催、12月が荘内病院主催で開催される。いずれも会員発表後に懇親会を設け会員相互の親睦を深めていたが、今回はコロナ禍のため懇親会を中止し、会員による話題提供2題とした。医師会館講堂を会場として、36名（勤務医13名、会員15名、職員その他8名）の参加者を集めて行われた。



最初は、庄内保健所所長の蘆野吉和先生の「COVID-19対策における地域連携の重要性について～平時にできない

ことは有事にもできない～」で、地区医師会員と協力してコロナ自宅療養者向け医療支援体制を整備することの重要性、コロナ以外にも感染症全般に対応できる地域感染対策支援チーム立ち上げの必要性などが紹介された。2題目が、4月から着任された鶴岡市病院事業管理者の八木実先生（久留米大学名誉教授）から、「久留米大学病院での大学病院経営の経験」について。病院長として赤字大学病院を黒字に転換できた経営実績を振り返り、病院経営の肝は、アイディアそのものよりは、信頼できる仲間を集めてそのアイディアの実現に向かって一緒に汗を流していく姿勢、過程が重要であることが強調された。これからの荘内病院の経営を考える意味で大いに参考になった。

勤務医委員会委員長 鈴木 聡

* * * * *

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策における地域連携の重要性について ～平時にできないことは有事にもできない～

庄内保健所所長 蘆野 吉和

COVID-19発生状況として、全国的には4つの波（第1波～第4波）があったが、庄内地域を含む山形県では、このうち第2波がなく、3つの波があった。

庄内地域での第2波は11月中旬以降に酒田市内の7カ所で始まり、そのうちの1グループの複数回の飲食を伴う会合で静かに広がっていた。感染が判明するのが遅くなった理由として、多くの人の症状が軽く短期間で軽快していたため医療機関を訪れていないこと、しばらく感染者が発生していなかったため診療所でも検査を行っていないことが挙げられる。そして、このウィルスは山容病院および三川病院に入り込み、病院内クラスターとなった。



そして、第3波は4月中旬、関連性のない3カ所で始まり、連休明けに収束した。1カ所はある集落内でのおそらくカラオケを介した蔓延で、1カ所は保育園でのクラスターであり、もう1カ所

は高校での変異株（アルファ株）のクラスターである。

この第3波では、家庭内感染者が多数であったこと、乳幼児を含めた若年者の感染があったこと、そして、一気に感染者が増えたことなど、これまでの蔓延とは大きく変わっており、変異株の影響と認識している。この陽性者の急増に対応するため、入院の他に、庄内地域での宿泊療養施設の開設、村山地域の宿泊療養所の利用、自宅療養（寮での隔離を含む）などの対応が必要不可欠であり、特に自宅療養の体制構築が重要であることを強く認識させられた。

以上、庄内地域での第2・第3波では、基本的に、感染症を基盤とする広域災害との認識をもち、県調整本部と保健所の単独活動ではなく、敢えて、関係する地域の団体・機関（市町行政、病院、地区医師会等）の連携および協働体制での対応とした。そして、この連携・協働体制を可能とするのが情報の共有で、新型コロナウイルス感染症対応に必要な情報の多くは保健所が持っていることから、保健所が積極的に連携を呼びかけ、適切な情報共有の場を設定しないと連携・協働はできない。

今回はその場として、対策本部の立ち上げと毎日のWeb会議を設定し、情報共有と具体的な対応（支援を含む）の協議、そして役割分担の決定を行った。

今後、7月以降において全国的には第5波の到来が懸念されており、特に自宅療養者および福祉施設への早期医療支援の体制の構築が重要となりつつある。このため、「平時でできないことは有事にはできない」ことを念頭において連携を強化してゆきたい。

* * * * *

久留米大学病院での大学病院経営の経験

鶴岡市病院事業管理者
前久留米大学病院病院長
久留米大学名誉教授

八木 実

令和3年4月1日付で三科 武前病院事業管理者の後任として着任しました。宜しくお願い致します。庄内病院は平成元年4月から1年間と平成4年4月から1年間の通算2年間、当時、鈴木伸男病院長、三科 武外科医長のもとで外科と小児外科で勤務させていただき、平成5年3月離任し新潟大学小児外科に帰学以来28年ぶりです。この間、日本は世界の潮流の中で大きく変わってきました。私自身、今まで、国立大学病院、私立医科大学病院、県立病院、赤十字病院、済生会病院、JA病院、市立病院、大規模私立病院、などに転勤し今日に至りました。これらの転勤を通じて言えることは、設立母体によって、運営の様式にそれぞれ特徴があり、それに則ってまずは慣れることで、完全に習慣化する前に時勢や社会構造の変革に乗り遅れないように、舵を切るべきだと思います。



この3月まで在籍した久留米大学医学部では、医学部附属病院で栄養部長、栄養治療部長（NST委員長）、診療情報センター長、薬剤部長、高額医療機器選定委員長、医療材料選定委員会委員長、病院倫理委員会委員長、保険診療適正化委員会委員長、副病院長（平成25年4月から平成

29年3月まで)、病院長(平成29年4月から令和2年3月までの3年間)などを歴任しました。副病院長・病院長時代で特に記憶に新しいところでは、厚生労働省の特定共同指導、病院機能評価、に対する責任者として旗振り役だったこと、ロボット支援手術装置(ダヴィンチ)をいち早く導入し、泌尿器、消化器外科、呼吸器外科、婦人科各領域での術者を病院長歳費を投入育成し、ロボット支援手術数の右肩上がりの増加で導入3年ほどで導入コストの元を取り採算ベースにしたこと、病院収益に直結するDPC医療機関別係数を院長就任2年半で全国私立医科大学29校中2位(全国国公私立大学医学部附属病院80校中6位)まで上昇させることができたこと、本院(約1000床)と分院(250床)の電子カルテ入れ替えにおいて2病院同一電子カルテとして将来の更新に備えノンカスタマイズで入れ替え導入を担当したことが挙げられます。また、患者さんの動態を絶えずチェックし、病院長発令後、毎週空いている時間帯に、病院事務部長と大口の紹介先に挨拶に伺いました。反対に、統計的に紹介が減っているエリアを分析し、挨拶回りして個々の病院との距離を近づけました。半年で約100件近く病院訪問しました。高額機器選定において工夫したのは、もう少しで壊れそうだから更新するという陳情は受け付けず、壊れるまで使っただき、壊れたら、病院長歳費を増額しておいていただきすぐに対応し、徹底して無駄を削減しました。私が病院長であった3年間で病床稼働率は7%アップ、手術件数は570件アップ、年間入院稼働額は24億円アップ、年間外来稼働額は21億円アップとなりました。これらの経験から急性期病院としては、同じ労働で高収益を上げるには加算の漏れをなくし、DPC係数をとにかく上げることが肝要と思われました。

一方、病院の繁栄にとって人材が何といっても宝です。「宝の中の宝といふは人材にしくはなし」と徳川家康が言っていたように、病院にあてはめると病院にとって人は宝。何をするにも人。結局、医局員がたくさんいることが肝要なのです。入局勧誘に関して一言、メッセージをお伝えしたいと思います。医学部学生の3割が女性であり、あらゆる状況下においても対応できるような、多彩な勤務形態を準備しての女性医局員の確保とワークライフバランスを考慮した多様性を有す医局運営が現代のキーワードです。スタッフ全部が同一のエンドポイントを目指すべきではなく、個々の力量に合わせて、希望をほぼ受け入れる方向で個人レベルの方向性を決めるべきです。研修医や学生は、医局の雰囲気は何気に事細かに見ており、日常から医局内の和やかな雰囲気を絶やさず、医局でできるだけみんなで昼食を共にして、忙しくても不機嫌に忙しいような立ち振る舞いはせず、爽やかな心地よい忙しさを伝えること。女性医師が心地よく働いていることを示すべきです。報告、連絡、相談はコミュニケーションの基本であることは言うまでもありません。医局内での指導支援といった観点からはオーベークラス、チューベークラス、入局から日が浅いクラスに応じてできるだけ的確に一つ上のクラスの者が指導し、任せられることは可及的に任せるべきです。女性医師が未婚、既婚、子供の有無、など多彩な個人の状況下にあっても個別に対応し、あらゆる勤務形態や復職支援を実践していることを示すべきです。学外に出張(出向)中の医局員には、定期的個人的に連絡を取り、動向を把握し、悩み事が蓄積しすぎないようにする必要があります。経験した症例は、できるだけ発表させ、そのあと論文にさせて初めて、その経験症例は完結したと自覚させるべきです。どんなことも仲間がいて始まるのです。結局、入局の契機は良き先輩ありきなのです。



YBCラジオ「ドクターアドバイスで きょうも元気」ラジオ出演体験記

•YBCラジオ「ドクターアドバイス」収録記

あい庄内クリニック 齊藤 佳寿

この度、2021年7月最終週のYBCラジオ放送「ドクターアドバイスで きょうも元気」への出演依頼を受け、数年ぶりに（汗）山形に行ってきました。

庄内から山形までの道のりは高速道路のおかげで随分短縮され、クリニックのある三川町から山形市のメディアタワーまでは1時間半で到着しました。

出演依頼を受けた日から、諸先生方の放送を拝聴し、自分はどのような話題を提供させてもらえば良いのか、悩む日々が続きました。

臨床からしばらく遠ざかっていた自分には、諸先生方のような博識ある内容のお話しはできないことはわかっているので、現在、自分が関わっている「在宅医療」について話題提供しました。

TOKYO2020オリンピック開催期間中の放送なので、いつものラジオリスナーさん達も、きっとオリンピックモードであまり聞いていないだろう、という思いもありながら、せっかく出演するからには、できるだけ一般の方にわかりやすく話を伝えられるように内容をまとめてみました。

しかしながら、収録当日は山形に向かう道中も緊張し通しで、収録スタジオのあるメディアタワーに入ってからガチガチでした。そんな中、私のお相手をしてくれたのは、YBC若手人気アナウンサーの牛島さん。かわいらしい笑顔で迎えてくれて、予め自分が用意していった原稿も、彼女の上質なインタビューで予想以上の放送内容に仕上がりました。担当ディレク



ターの加藤さんも、私が緊張しないように「おやじギャグだ」といいながら、場を和ませてくださり、言葉に詰まったり言葉を囁んでしまっても、業界用語で「つまむ」という手法を使って全く違和感が無いように編集してくださいました。

諸先生方の出演体験記にも書かれていましたが、彼等の話術はとても巧みで本当にプロでした。予定外、想定外のことを聞かれて、思わず素の自分を出してしまい、それが雑談に終わったのか、収録に使われたのか、終わった時には全く覚えていない自分がいました。

そしていざ、公共の電波で自分の声を聞くと、やはり「思わず」話した内容が使われていて、とても恥ずかしい気持ちになりました（汗）。そして、自分の口調に癖があることにも気が付きました。台本通りにはいかなかった分、普段の話し方が表れていて、もっと普段から話し方を意識してみようと思った次第です。

学会発表とは違った特別な緊張の時間でしたが、貴重な経験の機会をいただき、ありがとうございました。

●YBCラジオ「ドクターアドバイスで きょうも元気」ラジオ出演体験記

さとう耳鼻咽喉科医院 佐藤 邦広

もともとラジオ自体あまり聞くことはなく、車に乗っているときにつけるぐらいでFM放送が多かったため、「ドクターアドバイスで きょうも元気」というラジオ番組を知ったのは、昨年10月に医師会に加入して、「来週の担当は」というメールを見てからでした。それが意外に早く5月に依頼が来てしまいました。ラジオへの出演は未体験でしたが、せっかくの医師会からの依頼だし、ちょっとは医院の宣伝になるかもしれないし、あとはそんなに聞いている人は多くないんじゃないかと思い、結構気楽な気持ちで引き受けました。

テーマは大学時代に専門であった「いびきと睡眠時無呼吸」とし、得意分野であることと元来のめんどくさがり屋から原稿は全く用意せず山形メディアタワーへ向かいました。

到着すると、ディレクターからリクエスト曲のひとつが局内にないため、別の曲へ変更してもらえないかと言われました。そこで候補の曲名を伝えると、別室に入ってCDがいっぱい並んだ棚の中から探し始めました。てっきりなんらかのハードディスクに入っていてそこから選曲するかと思っていたのでアナログ感を感じました。

収録前の打ち合わせは雑談を交えたあっさりとしたものでした。これで大丈夫なのだろうかと思いながらも収録が始まりました。原稿がな



いこともあり、すらすら喋られずにちょっとつまってしまったため、「取り直しかな」と思ったら、「はい、OKです」とディレクターの声。大丈夫?と思いながらも曜日ごとに打ち合わせと収録が進んでいきました。私は緊張のため時間を気にする余裕がなく話していましたが、質問や相槌を打って設定時間内に話をまとめるテクニックはさすがプロのアナウンサーと思いました。全ての収録が終わり、さすがに最後にはチェックのために収録したものを聞かせてくれるだろうと思っていましたがそれもなく、「おつかれさまでした。ありがとうございました」と言われて拍子抜けし、少し不安のまま帰りました。

実際の放送は聞くかどうか迷いましたが聞きました。やっぱり本題の医学の部分だけでも原稿は作ったほうがよかったかなと反省しました。

Introduction

研修医

鶴岡市立荘内病院研修医 1 年目 赤尾 剛



こんにちは。荘内病院研修医 1 年目の赤尾剛と申します。実際にお会いした方はおわかりかと思いますが、この写真の私、実物とはだいぶ違います。実際の

私はもう少し優しい目元でマイルドな顔をしています。山梨県甲府市で生まれ育ち、大学から山形県に来ました。大学に入るまでに少し遠回りをしたため、そこそこの高齢研修医になってしまっています。趣味はサッカー観戦と囲碁です。サッカー観戦は主にイギリスのリヴァプールFCの試合を見ています。2018/19シーズンのCL準決勝バルセロナ戦の大逆転劇は猛烈に感動しました。いつの日か本拠地アンフィールドに足を運んで本場のリヴァプール熱を直に感じたいと思っています。囲碁は小学生の時に独学で始め、六段の腕です。囲碁は局所の善悪にとらわれず、全体を見て次の手を考えることが大切です。これは医療にも通ずるところがあるのではないかと考えています。囲碁をご趣味にされている先生がいらっしゃいましたら、ぜひ一局よろしく願いいたします。

医学の道を選んだ私ですが、幼い頃は昆虫少年でした。4歳の頃、ホームセンターで買ってもらったカブトムシをきっかけに、昆虫の採集や飼育に興味を持つようになりました。

そんな昆虫少年であった私の最大の関心事は

野生のオオクワガタを採集することでした。私の出身地である山梨県にはオオクワガタの名産地である韮崎があり、毎年夏にはオオクワガタを求めて昆虫採集に出向いていました。といっても採れるのはコクワとノコギリだけであり、昆虫少年1人がどんなに頑張ったところでオオクワガタはそう簡単に採れるものではありませんでした。オオクワガタへの情熱は冷めることなく、大学入学で山形県へ来た際の目標の一つとして、オオクワガタの採集を掲げていました。実は山形県もオオクワガタの名産地の一つです。大人になった私は、車を手に入れ、夜行性になり（オオクワガタも夜行性です）、全長5メートルの虫取り網を手に入れ、あの頃より圧倒的にレベルが上がりました。自身で導き出した統計に基づき確率の高い日に絞り、夜な夜な山を駆けずり回り、そしてついにその時は訪れました。大学2年目の夏、山形県某所にて、70mmのオオクワガタのオスを採集することに成功。幼い頃から憧れ続けた野生のオオクワガタをやっとこの手に収めることができ、嬉しさのあまり山奥で一人涙しました。

昆虫少年としての夢を叶えた私ですが、医師としては第一歩を踏み出したばかりです。今は目の前のことをこなすだけで精一杯ではありますが、一日一日の学びを大切に、次なる目標の実現に向け精進して参ります。これからもよろしく願いいたします。

マイペット&マイホビー

— 第 113 回 —

よこやま皮膚科医院 横山 靖

一年先延ばしにされていた東京オリンピックも閉幕した。コロナによる延期といえば昨年開催予定のショパン・コンクールも今年の秋に延期された。オリンピックでもそうだが、採点競技では審判員たちの評価を巡り、悲喜こもごものドラマが繰り返されてきた。たいていは選手の方からクレームが出るが、ショパン・コンクールでは審査員の方がもめる。1955年の第5回ショパン・コンクール、あのアシュケナーズが2位となった判定に審査員だった鬼才ミケランジェリが怒り、審査員を降りた。ミケランジェリは当時すでに幻のピアニストといわれていて、その芸術はその後の多くのピアニストに影響を与えた巨匠である。1位はハラシェビッチ。ショパンの母国、ポーランドのピアニストである。主催者が母国のピアニストを優勝させたかっただけという憶測を生んだりした。しかも、ややこしいことにハラシェビッチは審査員を降りたミケランジェリの下で研鑽を積んだ彼の弟子であった。しかし師匠としては公平な目を見てアシュケナーズの方が才能があると判断したのだろう。第6回はポリニー。審査委員長の御大ルービンシュテインが審査員を前に『ここにいる誰よりもうまく弾けるのだから』といった一言で決まったという。ポリニーは18歳でショパン・コンクールに優勝した後、ミラノ大学で物理学と美学を学び、やがてミケランジェリの門を叩く。やはりミケランジェリは凄

いのだ。第7回は天才アルゲリッチ、優勝は当然だろう。彼女もミケランジェリの下に一年半ほどいた。またしてもミケランジェリである。しかし、さすがのミケランジェリもアルゲリッチには教えることはなかったのかレッスンは4回ほどで、あとは二人でフェラーリに乗りドライブをしたり、卓球をしていたらしい。レッスンをほとんどしなかったことについてミケランジェリは『静寂の音楽を教えていた』と語っているようである。そして第10回のショパン・コンクール。優勝はベトナムのダン・タイ・ソンだが、素晴らしく独創的で新しいショパン像を披露したルーマニアのポゴレリチが予選で落ちた。この時審査員をしていたアルゲリッチが猛抗議し、その後の審査をボイコットして帰国した。結果的に師弟二人してショパン・コンクールの審査員を辞めるという珍しいこととなった。2回の審査員辞任エピソードの結果を見ると、第5回優勝のハラシェビッチは忘れさられ、2位のアシュケナーズはピアニストとして英デッカにたくさんの録音を残し、キャリアの後半では指揮者として世界の一流オケで活躍した。N響でも2004年から2007年まで音楽監督を務めた。第10回大会優勝のダン・タイ・ソンも素晴らしいピアニストだと思うがいまや話題にも上らない。一方、予選落ちのポゴレリチはその奇抜な演奏に好き嫌いははっきり分かれるが、熱狂的ファンもおり、彼の名前を冠したピ

アノ・コンクールまで開催されている。私も好きではないと思っていたが、調べてみると意外にもCDを7枚も持っていた。何ととっても彼の演奏は変わっているので聞きなれた曲が彼の手にかかるとどんな風になるのか、怖いもの見たさのようなもので購入したのだろう。しかし、改めて聴いてみるとどれも独創的で新鮮な音楽だった。特にショパンのスケルツォはさすがに凄いと思った。やはりミケランジェリやアルゲリッチの慧眼はさすがだと思う。まさに天才は天才を知るである。ショパンついでに、自分がショパンのどの曲が好きかを考えてみた。協奏曲やソナタなどの大曲を横目で見ながらも、バラードの1番やスケルツォの4番、舟歌が好きということになるだろうか。バラードの1番といえば羽生結弦が平昌オリンピックで金メダルを取った時に使い、クラシック・ファンの枠を超えた人気曲となった。スケルツォはショパンには4曲ある。スケルツォはイタリア語で冗談とか滑稽という意味である。明るくユーモラスなイメージだが1～3番は暗い色調の曲で、あのシューマンが「ショパン氏のスケルツォはとても冗談とは呼べない。冗談がこんなに暗い服を着ているなら、陰鬱はどんな格好をすればよいのか」と評論しているが、4番は本来の意味に立ち返ったように明るく始まる。しかし、中間部の哀愁を帯びた旋律は震えるほど美しく、曲の始まりが明るかった分だけより切なく響く。そして舟歌である。舟歌と訳されているが原題名はバルカローレ。バルカローレといえばヴェニス運河を航行するゴンドラで歌われる舟歌のことである。8分の12拍子の寄せては返す波のようなリズムに載せて典雅なメ

ロディーが奏でられる。優しい陽光の下、心地よい波に揺られ、穏やかな水面をたゆたうような優美な名曲である。ショパン晩年の作で、彼の最後の演奏会になったパリでのコンサートでも弾いている。結局、私はこの曲が一番好きかもしれない。お勧めはポリニー。完璧な技巧を持つが、それが時として冷たく無機質に響く時もある彼のピアノだが、このバルカローレは素晴らしい。彼のダイヤモンドのように輝く音が、水面に映る太陽の光のようにキラキラときらめく。ポリニーのライバルともいえるアルゲリッチの舟歌はどうだろう。これがまた凄いのだが、しかしこれは舟歌などという優雅のものではない。例えるならカヌーによる激流下り。美しい和音で始まったかと思うと船はあっという間に激しく波打つ流れに突っ込んでいく。ここには8分の12拍子の寄せては返す波はない。船は渦巻き、荒れ狂う川に右に左に翻弄される。乗り手は打ちつける波しぶきに晒され、今にも船から振り落とされそうな激しい演奏である。いかにも自由奔放なアルゲリッチらしい演奏だが、同じ舟歌なのにショパン・コンクール優勝者を比べてもこうまで違うのか。やはり芸術に順番をつけるなんて無理な話なのだと思ってしまう。



表紙

「百日紅」

齋藤 慎

百日間咲くので百日紅（ひゃくじつこう）。7月から9月まで咲いている。我が家の百日紅は例年ウドンコ病が付き花付きが悪かったが今年は周囲の木の枝を払ったら花付きが良くなった。9月が親父の祥月。30数年前の紅い花を思い出す。

編集後記

昨年の夏、東京オリンピック・パラリンピックなどのさまざまなイベントが新型コロナウイルス感染症にて中止になってしまいました。当時はショックもありましたが、状況を考えると仕方ないのかなといった考えもあり、複雑な気持ちでした。そして今年の夏はというと、結局新型コロナウイルスの猛威は昨年を上回り、オリンピック・パラリンピックは何とか開催に至ったものの、無観客といった不完全な形になってしまいました。

新型コロナウイルスは変異を繰り返し、感染者の症状も様々で（ほぼ無症状～急に重症化するなど）、ちょっとしたことでクラスターが生じてしまう、本当に厄介なウイルスです。

少しずつ進んできているワクチン接種に期待したいところなのですが、異物混入の問題が生じました。現時点でそれが何なのか、影響はどうなのか分かっていないため、今後の解明、ならびに情報提供を待ちたいと思いますが、それによりワクチン接種の遅延など影響が出ないことを願います。

このような状況で旅行に行くことは出来なかったため気分だけでも、と思い“ふるさと納税”を利用しジンギスカン（北海道）、讃岐うどん（香川）、沖縄そば（沖縄）など各地の食事を頼み、自宅で食しました。普段あまり食べないような物なので、新鮮な気分で美味しく感じました。満足はできたのですが、何だか若干の物足りなさを感じました。やはり現地に行き、気温や湿度、景色、雰囲気などを感じながらの食事にはかないません（もちろんマスク会食ではなく）。早くそのようなことが出来る時期が来ることを切に願います。

(中目 哲平)

編集委員：渡邊秀平・小野俊孝・吉田 宏・木根淵智子・菅原真樹・中目哲平

発行所：一般社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail ishikai@tsuruoka-med.jp

ホームページにも掲載しております  URL <http://www.tsuruoka-med.jp>